

「支える」を支えたい

福岡市立香椎第3中学校3年 山下 紗季

「税金」と聞いても特に何も思い浮かばない。良いイメージもあまりない。少し前までの自分はそうだったと思う。

中学校に入学して半年ほど経った頃、授業で「自分の将来について考える」という課題が出されたことがあった。当時の自分に描いていた未来の想像図などなく、自分にとっては難易度の高いお題だと思った。しいて出すならば多くの人の日常に関わる仕事がいい。それくらいだった。それから間もなく、街中のポスターで「国税専門官募集」の文面を目にした。聞いたこともない職業名になぜか目が留まり、家に帰ってすぐにその名前を検索した。一番上に表示されたのは「国税庁」の文字。画面をスクロールすると「国税専門官は税のスペシャリスト」の説明があった。その他にも調べていくと国の財政の中心を直接支えるという職業に魅力を感じて、直感的にこれになりたいと思った。

国税専門官になりたい。そう思ったは良いものの、当時の現状では「税金」について全くの無知だった。身近な例では消費税くらいしか思い浮かばず、それが具体的に何にどんな風に使われているのかさえ知らなかった。けれど「税のスペシャリスト」になるには税の基本的なしくみだけでも知っておくべきだと思い、調べたり親に聞いたりしているうちに、少しずつ税について分かってきた。まずは税には消費税だけでなく約五十種類の様々な税があること。その中でも税率や納税の対象者、目的などはそれぞれ異なること。想像よりはるか身近な場面で税金が使われていること。特に所得税や贈与税といった売買の過程ではない自分の利益自体にかかる税もあることに驚いた。そして集められた税金の約三分の一にあたる三十七兆円が「社会保障関係費」として国民の生活や医療に充てられているということを知って自分たちの安心で安全な暮らしは税金によってつくられていると言っても過言ではないと思った。少し税について理解してからは、税金でつくられたよく利用する地下鉄や体育館、公園で向ける視点が変わったし、そのために買い物の際に消費税を支払うのも嫌ではなくなった。むしろ自分が税金を通じて社会を支えることができると感じて嬉しい気持ちの方が強かった。自分が税金に対しての意識が変わってこのように思えたように、納税することはただお金を支払うだけでなく、その中には一人一人の社会への期待が含まれていて、納税することにより、その意志が示せると思う。しかし世の中には税金に対して良いイメージばかり抱いていない人がいるのも事実である。だからこそ自分は自分の経験を生かしてそのような人にも税金の社会貢献について理解してもらい、この国一人一人の「支える」という気持ちをそばで直接支えられる国税専門官になりたい。